それでいいんだ

Text by 五九

人と、何が同じなのだろうか。
ヴラドは敵の亡骸を穿った、その白く赤い手を見た。

レイシフト先は賑わい、人の活気溢れている筈のフランスの町であった。
ワイバーンの群れに蹂躙され、瓦礫と化す家屋。
逃げ惑う人々。
叶わず、道を赤く染める者。
少年少女、若き青年達の口に入ることもなく潰れ、床を汚すリンゴ達。
生前は戦に身を投じ続けたヴラドだが、抵抗する術を持たない彼らがただ無残に殺される事には腹に据えかねていた。
俯き、屈み、身体の底から湧き上がる怒りを込め、目の前のワイバーンを捉える。

「――カズィクル・ベイ」

硬い肉を裂き、獣の悲鳴が聞こえる。
血の雨をもって惨劇は終わりを告げた。

――――

「お疲れ様。今日はもう各自部屋で休んで」

若きマスターの命によりレイシフトに参加していたサーヴァント達は各々の部屋に帰っていく。
ヴラドも部屋に帰ろうと離れた塔へと歩き出す。
途中の談話室から幼い笑い声が聞こえた。
複数人いるらしい、四角い光る箱を見て表情をくるくるさせているのは誠に可愛らしい。

「あら、おかえりなさいおじさま」
「ただいま……何をしている？」
「映画って言うのよ。コメディですって。お医者様と動物がお話できて、色々問題を引き起こしちゃうの」

いつもかぶっている装飾をゴタゴタに詰め込んだ帽子を置いた彼女、エリザベートは楽しげに笑う。
横に並ぶジャック・ザ・リッパーやナーサリーライムはこちらに気づいていないのか光る箱――いや、確かテレビというものを熱心に見ていた。
おぉ、わぁ、感嘆の声をあげ、少しずつ身体を前のめりに倒していく。

「それ以上近づくな、一歩下がれ。俺が見えないだろう。全くなんてゴミのような物語だ」
「でも、見てるじゃないの」
「そうだ、見ている。ゴミのようでも物語には違いないからな」

ヴラドからは死角にいて見えなかったが、ソファに隠れるようにアンデルセンが小言を言っている。
物語を書くための勉強という意味だろう、ヴラドはそう思う事にした。

「……ん？　……ははぁ、ワラキアの領主様か。散々働いてきた後だろうな。全く肉体労働をさせられた後だというのに疲れた顔も……いや、珍しい事もある」
「なんだ」

ソファ越しにこちらを覗くアンデルセンの顔は不快だとでも言うように眉根をあげる。
ふん、と鼻を鳴らした後に再びテレビに目線を戻し、ぼそりと呟く。

「つまらん事で思いつめるなど全く時間の無駄だな」

――――――

目が醒める。
珍しく霊体化もせずベッドで眠っていたヴラドは響く時計の針の音に眉根を寄せた。
時間は午前０時。
夜間勤務の職員以外は眠っている頃だろう。
構わず再び眠りに落ちればいいのだろうが、いくら目を瞑っても時が無為に過ぎるだけだった。
吸血鬼として喚ばれてしまったからだろう。
常ならばこの時間はいつも彼は起きている。
そもそも部屋に入るなり即座に寝入ってしまった事自体が珍しい。
まだ午後の７時であったのに活動もせずにだ。

「……疎ましき事だ」

談話室にいた少女たちの笑い声を思い出す。
そしてあのフランスの町。
動かなくなった少女や少年達の姿を思い出す。
その中で僅かに息のあった少女が最期に残した言葉。

（寒い）

縋るように差し出された小さな手を戸惑いながらも握ったヴラドは少女の手がまだ暖かい事になんとも言えない虚しさを感じた。
事切れる瞬間微かに少女が笑ったような気がしたがその理由を聞きたいと思ったのはなぜだろう。
不思議な事に、喉の渇きを血ではなく水で潤したいと思い、ヴラドは食堂へと向かった。

――――――

ガチャ、カチャカチャ

「……？」

誰もいないはずの食堂から金属の音がする。
夜勤の職員が食料を漁っているのかと思ったがそこにはサーヴァントである痩躯の青年が立っていた。

「あれ、ヴラドの旦那も夜食つまみに来たんですか？」
「いや……水を……」

「水？　血じゃなくてですか……？　あっちょっと待ってくださいよ、今持って行きますんで」

痩躯の青年、ロビンフッドは黒いタンクトップとスウェットといういつもよりも軽装な身で台所に立っていた。
グツグツという音をさせている鍋を置き、食器棚から透明なコップを出す。

「はい」
「もらおう」

喉仏を上下させ、一気に飲み干す。
片付けますよとヴラドからコップを受け取ろうとしたロビンは顔をキョトンとさせ、尋ねる。

「……何か、ありました？」
「――何か、とは？」
「いや、なんかいつもより疲れてんなって」

しばしの無言、グツグツと鍋が煮える音だけが聞こえる。
あっいけねぇとロビンの声でようやくその静寂は打ち破られた。

「ロビン、余が――」
「んー、とりあえず旦那、適当に座ってくれませんかね。どうせ寝れないんでしょう」

忙しなく台所の中を動き回るロビンの言葉を無視して部屋に帰っても良かったのだが、ヴラドはその気にはなれなかった。
動くロビンが見えるところを選ぶと長躯を屈めて椅子に座る。

「ちょっと失礼しますよ」

ヴラドの座るテーブルの上に鍋敷きを置き、小皿を置いていく。
二対ずつ置いていくのはヴラドにも食べていけ、という事だろうか。

「余に食事は不要である。食す必要性が」
「なくても食べる事はできるでしょう。いいから座っててください」

再び奥に戻っていくロビンの姿を目で追う。
下手をすればここにいるどのサーヴァントよりも彼のほうが

気遣いが上手いのかもしれない。
箸は使えますかという声に使える、と短く返事をした。
「はい、お待たせしました」
小ぶりな鍋が湯気を吐き出しながら机の上に置かれた。
薄い茶色の海に具材がみっちりと浮かんでいる。
「……なんだこれは……？」
「おでんです。日本の伝統食らしいですよ。」
レトルト品が大半なんで全部手作りってわけじゃないんですけどと笑いながらロビンはいう。
小皿を取り、おたまで具材を拾い上げていく彼の手際には無駄がない。
「はい、旦那の分ね。まずは大根と卵」
差し出されたものを受け取り、ヴラドはじっとそれを見つめる。
熱いうちに食べちゃってください、それが美味しいんですよというロビンの言葉に大人しく従った。
大根の柔らかな食感と汁気が冷たい喉を通り、暖かさを伝える。
美味いですか？　と聞く声に美味だと短く言い、残りの欠片を口に運んだ。
続いて卵を半分に割り、濃厚な黄身の風味と弾力のある歯ごたえを返してくる白身を堪能した。
つい、夢中になって食べていることにヴラドは気付かない。
食べ終えて前を向くとロビンと目があう。
いつものニヒルな笑い方とは違いにっこりと破顔した顔がそこにはあった。
「そこまで美味そうに食ってくれんなら、作った甲斐があるってもんですよ」
「……」
「あっ他のいれますね。はんぺんと昆布なんてどうでしょう」
せっせと新しい具を入れ、再びヴラドに小皿を渡すロビンは自分も、と自らの皿にも具を入れ始める。
いただきますと手を合わせるのは日本食にならってだろうか、小さな口に大根を頬張る姿は少し幼い。
ヴラドも綺麗に巻かれた昆布を一口齧り、咀嚼し、飲み込んだ。

「……レイシフト先で……町がワイバーンに襲われていた」
口を開けて卵を頬張ったロビンが少しばかり動きを止める。
咀嚼し、飲み込み、口を開ける。
「聞きました。のどかな普通の町が戦場になったって」
「……死傷者が多く、町の半分の民が犠牲になったと」
「……はい……」
「その中に幼子がいてな、助からなかったが」
「……」
二人の手は動かない。
鍋から立ち上る湯気だけが動くものだった。
「最期に……寒い。そう言った。手を差し伸べられたからつい握ってしまった」
「……」
「事切れる瞬間、気のせいやもしれぬが笑った。その子供は笑ったのだ」
「……」
「……余の……吸血鬼の身よりも暖かい手であった。事切れる寸前であるというのに。血もろくに残っていない体でもだ」
ヴラドは息を吸い、吐き出し、整え、続けた。
ロビンは頷き、はい、と小さく応える。
「寒い、と言っていたのに、遥かに冷たい手で触れたことで凍えさせてしまったのではないかと。吸血鬼の手では余計に不安にさせてしまってはないだろうかと」
箸を握る長い指に力が入る。
例え求められていたとしても、触れない方が、見ていただけの方が良かったのではないか。
あれは絶望の果ての笑みだったのかもしれない。
真意を知ることはもう叶わないだろうが、この鬼の身が人と同等の身であったならば、彼女を人として見送ることができたのだろうか。
沈黙。長い沈黙。
鍋から立ち上る湯気は薄くなり始め、それでも両者それ以上何も言わない。
「……なぁ、旦那。このおでん美味い？」

沈黙を破ったのはまたしてもロビンだった。

「……？」

張り詰めたヴラドの顔と違い、ロビンは朗らかに笑う。

「このおでん、美味いですか？」

「……美味であるな」

「そうですか、ならいいんですよ」

何がいいのだろう、怪訝な顔をするヴラドにロビンは御構い無しに続ける。

「吸血鬼だろうが人間だろうが、飯を美味いってちゃんと言えるなら変わりゃしませんよ。鬼でも人でも、助けたいって思ったならそれは助けたいって事でしょ。旦那は咄嗟だったかもしれないけどさ」

「な」

「その子の本心はわかんねぇですけどね。旦那が手を握ってくれて嬉しかったと思うし、安心して眠れたと俺は思います。だって最後に笑ったんでしょ？　なら、やったことは間違いじゃないです」

間違いじゃない。

その一言にヴラドは今まで心を侵食していた大きな氷塊を忘れ去ってしまった。

あれでいい、あれでよかったのだ。

結果的に冷たい手で触れてしまったとしてもあの子の心がほんの少しでも暖かくなれたらそれでいい。

考えたって仕方ない。

単純なこと。

助けたかったから手を差し伸べた。

これで十分。

「重く考えるのは旦那の悪い癖ですね。それよりも、その子の幸福を祈りましょうや。天国があるなら、今頃ベッドの中でおねんねの時間でしょうねぇ」

更に湯気の薄くなった鍋を覗き込み、冷めちゃいましたねとこぼした。

鉛玉のようだったこの身が軽い。

ヴラドは細く息を吸う。

「そうだな、余も、あれでよかったと思っている」

ようやく、彼の重い口からそれが言えた。

その問題に吸血鬼や人であるという前提は必要ない。

同じ部分や違う部分を探しても意味はない。

助からなかった命だとしても幼子の安寧を願ったならばそれでいい。

「ロビン」

「なんですか」

「その黒いのを……巻いてある……」

「昆布」

「昆布を余は所望する」

「はいはいちょっとお待ちを、その前に鍋温め直しますね」

遠ざかっていくロビンの背中を見ながらヴラドは残りの昆布を平らげた。

美味しい。

……これも、そう思えるならそれでいいんだろう。

（終わり）